

峠の狐（城東町）

後川〈しつかわ〉の人が、篠山のお祭りによぼれての帰り、おみやげのご馳走〈ちそう〉の包みを二人で棒に通して、もう真夜中に近いころ、古坂〈ふるさか〉峠にさしかかりました

すると、むこうから一人の女の人が、やって来ました。誰かと思ってよく見ると、自分の妻です。

「今ごろ、どこへ行くのか。」

と聞きますと、

「あまりおそいので、お前さんの迎えに来たんだよ。そのご馳走は、わたしが持ちましょう。」

といって包を取ろうとしました。

「こんな真夜中に女一人で峠道を・・・これは怪〈あや〉しいぞ。」と思ったつれの男は、ご馳走を取ろうとした時、女の目がギラッと光って、鼻がビクビクと動いたのを見て、「何かが化〈ば〉けているんだ。」と思いとっさに持っていた小刀で、女の胸をグサッと突きさしました。女は、キャンと鳴いて姿が消えてしまいました。

「何をするんじゃ。」

「いや、これは人間じゃない。」

「女房を突きさしたな。」

「いや、これは化けもんじゃ。」

と二人は、いい争っているうちに、今にもつかみ合いしそうになりましたが、「それでは・・・。」と思い、大いそぎで家まで帰ってみました。

「おーい、今帰ったぞー。」

家では寝ていた妻が、飛び起きていました。

「ああ、よかった、夢でよかった。今、お前さんに胸を突きさされたと思ったら、目がさめたよ。」

といって、大きなあくびを一つしました。

「さては、やっぱり。」

と、夜が明けてから、峠まで行ってみますと、

「あっ、狐だ！」

思わず叫〈さけ〉びました。

そこには、一匹の大きな狐が、胸を突きさされて死んでいたのです。

